

違い、同期イコール同年兵ではなく、我々、丙飛の第十四期生は十五志から十七志入団の現役兵から選ばされた編成である。

我々丙飛の子科連教育は、前述の甲飛、乙飛とは違い、海軍軍人のイロハは新兵時代に終わっており、子科連教育の期間も二カ月と短縮されている。従って、教育講座の中心は搭乗員として必要科目の「航空力学、流体力学」など理論が柱で、その他、航空氣象学、通信術などで、特に航空力学の「翼面積と空氣抵抗」など頭を悩ますことばかりであった。

こうした座学中心の子科連教育が終了する二カ月後、練習生の適性に応じて、陸上機と水上機の操縦員及び偵察員に選ばされた。陸上機と水上機の操縦員二百三十八人、偵察員百五十九人に分けられ、各々航空隊に配属と決定された。私は水上機操縦に選ばされ、子供時より目指して来た「水上機操縦」の念願はここに叶ったのである。

大東亜戦争緒戦

死すべき命永らえて

三重県 藤原長録

振り返って思い出しますと、私らはちょうど大正デモクラシー気風と、一方では昭和の時代初期の建国復興、国威宣揚の掛け声の中で、日に日に軍国国家へと一歩一歩近づいている、そのような環境で教育を受け、育つて来たような時代でした。

考えて見ますと、そろそろ物事が分かりかけて、学校へ行きますと、どこでも同じように、まずやかましく言われたのは「不況」の話でした。いわゆる大正の戦後（第一次世界大戦後）景気が一時ありまして、この上野市も栄えて来ましたが、それが終わりますと、今度は不況が来ました。予讃銀行が倒産したなど、覚えておられる方もあるでしょうが、そういう時代でした。だから不景気の中に、今の時代と同様に、私らが

学校を出た時分には就職する先がなかった。そのような中で、私は上野の中学校に行っておりましたけれども、ちょうど中学でもストライキがはやっていったという時代でもありました。

私は、そのような中で生い立ちでございました。そして社会は、いわゆる支那事変だ、爆弾三勇士だ、ああ何だ、というようなことが大きくなって来ましたが、しかし不況の波もひと通りのものではございませんでした。上野でも、その当時、数多くの商店などが倒産したこともございました。中にはどこか分かりますが「あそこが夜逃げした」などと、夜逃げがはやった時分です。今の若い人には「夜逃げ」と言っても分かりませんですね。

そんな中で、国が方向付けたのは「ブラジル移民」などで、これがやかましく言われました。そしてやはり上野からも満州開拓というので、私たちの中学の同期の者も、上野辺りでは就職することもなく、満鉄など満州の企業に就職するものもたくさんありました。そ

うした時代が背景にあります。そうした中で、とくに長男は家の後を継ぐ、次男はまあ丁稚に行くというのが普通でした。私の友達も大阪の船難の方へ丁稚に行きました。私も大阪の鉄工所へ見習に行った訳であります。

そんな時分に、国を挙げてだんだん軍国調というか愛国心というか、また思想的には忘れもせんが頭山満とか何某という人たちがやかましく思想改革を言う、そういう中で大きくなった私たちであります。「日本の国は、もう外国へ行かなあしよがないがな、何とかせねばならぬ」という気分がありました。そしてそれを前後しまして五・一五事件、二・二六事件というようなものが、若い私たちの思想をいろいろと揺さぶりました。

片一方で、大正デモクラシーの思想を持ちながら片方で、そういう思想で煽られる。今日、各新聞はまあ平和論ばかりですけれども、その当時の新聞といたたら、どこもかしこも戦争を煽ることばかりでした。まあ新聞もいい加減なものですなあ。今やかましく平

和・平和や何だかんだと言っておりますが、その当時は明け暮れ「爆弾三勇士」だ何だとかいって愛国心の高揚ばかりです。それは軍部がしたのか誰がしたのか、私には分かりませんが、そんな時代に大きくなったのが私らの年代です。

だから私の友達も少年航空兵に行くなど、そのような方面に中学卒業後の選択をしたり、また中学の途中からそういう方面に行った者もおります。そのなかで私はほんやりしておりましたが、世の中はそういう方に流れていました。という訳で、記憶に残ることもございませぬけれども、そうした中で、昔は兵隊に行かないと、忌避したり逃げたりしたら憲兵に捕まるので、それは私たちの年代は兵役に取られるのが情けないけれども「しゃあないな」と諦めておりました。

兵隊というのは国民の義務ということで、一銭五厘の葉書の通知だけで兵隊に行った訳です。これは赤紙という召集の話ですが、私は現役徴集でした。昭和十二（一九三七）年に支那事変が始まりまして、私は昭和十四年に入隊した訳です。

私は学校では機械の関係、とくに内燃機関の勉強だけは親にさせてもらっておりましたので、就職は大阪の淀川の機械製作所の方へ入ったのですけれども、当時、たまたま都島の方に出ておりました。そして徴兵検査を受けましたら甲種合格ということで、その当時は一月の十日に入営が決まっておりました。当時、上野町の兵事係が愛宕町の加藤さんという方で、その方がいろいろお世話をして下さいまして徴兵検査を受けたのですが、幸か不幸か甲種合格ということになりました。また向こうから通知がくるまでは、海軍に取られるのか陸軍に取られるのか、そして兵科にもいろいろあり、陸軍なら歩兵に行くのか輜重しちゆうに行くのかさっぱり分かりません。

だから私は分かんから待っておりますたら通知がきまして「飛行兵」だということでした。そのころ、この上野では飛行兵というのはありません。それで飛行兵に行った人があるかと思っただけで方々歩き回りました。「おい飛行兵ってどんなこと？」「それはな、自動車の運転だよ」と。ところが私は自動車の運転はでき

ませんでした。当時は自動車学校もありません。ちょうど私の身内の増田周一というのが大增自動車というトラック屋をしておりましたので、「オッサンよ、奉公や。トラックの運転教えてくれんか」「そんなら、お前ちょっと稽古してみろ」ということで兵隊に行く間、ちょっと自動車運転の稽古をしました。信楽までゆきひらを運ぶ。「お前、前を見ている」というので前を見ていたら「オーライ、オーライ」というので突っ込んでしまつて、出荷する瀬戸物を割つてしまつて、オッサンに怒られたことがあります。そんな経験もありました。

それで飛行兵というのは、私は隊へ入るのかと思つておりましたが、隊へは入らずに各務ヶ原の航空教育隊へ入れということでした。ああ教育隊ということで勉強させてくれるのかなと思つておりました。一月十日に各務ヶ原の航空教育隊へ入り、隊には第一中隊、第二中隊とありまして、私は第二中隊の第八班というところへ入らせてもらいました。それで隊で顔を合わせたら上野の赤阪町の三谷健治君と同期になりました。

健治君は私の中学の先輩でして、今京都大学の教授をしておりますが、彼は大学出で同じ中隊に入った訳です。

「あら健さん、先輩」「おれ学校で入隊をちょっと伸ばしておったのだ」というようなことで、ああいい人がいてくれた、という思いでした。ところで同期のもの学歴を聞いてみたら、班内十四人でございまして、このうち十人が大学出でした。あとは旧制高校へ上がった者が四人、私は旧制高校の方でしたので四人の仲間です。ご存知かどうか知りませんが、例のエチオピアの皇太子と結婚するといふ噂になつた黒田某と云う男爵の娘の兄弟も来ておりました。

そこで何を教わたつたかといひますとエンジンのことでした。ところが兵隊といふところは面白いところです。いちいち名称が違ふのです。私が学校で習つた器具の名称がブライヤだと呼んでいて、ねじ回し（チョウラ回し）などです。「おい、そのチョウラ回しを持って来い」と。

私が教育隊で受けた教育では、皆さんが受けたよう

なビンはやられませんでした。学校みたいなどこでした。そしてモデルの飛行機は「九三双軽（九三式双発軽爆撃機）」という飛行機でございまして、今の飛行機のようにツルツルでないのですね。トタンみたいなベコベコのアルミニウムの飛行機でした。私はその時には「九三双軽」というのはどんな飛行機かまだ分からんのですね。また戦闘機は知っておりましたけれども爆撃機や軽爆とかの機種も知らないのに、そこへ入ったのですから。

ところがエンジンの方は一応、ドイツのベンベという会社のエンジンだとか、空冷式エンジンなどということも勉強させていただきました。そこでまあ半年間、勉強した訳です。ところが、私らの第二中隊の方は良かったのですが、第一中隊の方は何をしているのか初年兵ですから分かりません。大体のことをいいますと自動車の運転とかが第一中隊の関係でした。後で分かったのですが、飛行場大隊というのがございまして、設営とかその方面の人たちは第一中隊で、第二中隊は無線だとか技術関係でした。第一中隊の方では同

期の兵が逃げたという噂がありました。よっぽど辛かったのでしょう。私の方は良かったのですが、第一中隊の方はビンタが多かったので逃げたということでした。

そんな中で教育を受けまして、ちょうど昭和十四年の六月に浜松の重爆隊へ配属になりました。そして同日「動員下令」で、今度は広島・宇品まで夜行で行きました。親にも面会させてくれませんが、汽車の窓は全部締め切ってしまい、見送りなしで宇品まで連れて行かれ、そこから船で、馬と兵器と一緒に中国の北支の山東省に上陸した訳です。

この間五日間掛っております、黄河の水をみて「ああ黄色いな」ということがよく分かりました。まあ泥みたいな真っ黄色い水が流れておりました。船足は遅く、馬も兵も一緒でした。何人位乗っていたか分かりません。太沽から北京の方へ行った訳です。そして北京の郊外の南苑というところに飛行場がございまして、そこには宋哲元の十九路軍という部隊がおりま

して、その軍の旧兵舎を私たちの宿舍として、そこに
入りました。この飛行場というのは初めて中国にでき
た飛行場です。そして、そこで第二期の現地教育を受
けました。

それで、これまで至極順調で、恐い目にもあわず何
も知らずにいました。とくに航空隊というのは特殊で
して、一番楽で、他の兵科の兵隊から見るとよっぽど
楽にさせてもらいました。なぜかというの特科兵みた
いなもので、食うものが違うのです。海軍部隊のこと
は分かりませんが、陸軍さんの歩兵部隊や輜重兵の話
を聞きますと、それが当たり前ですが航空隊は別で、
それに同じ航空兵でありながら飛行場大隊の方の給養
というものは物凄く悪かったです。我々飛行機乗り
は特別扱いで、私は大分幸せでした。その点で苦勞は
しておりません。

ここで飛行隊の内容を申し上げますと、一個中隊の
中に将校、下士官、兵と分かれています、兵の数は
僅か三班しかない。下士官の方は一班、二班、三班ま

であります。曹長班、軍曹班、伍長班です。兵隊の数
よりも上の方が多い、そして将校班です。一個連隊で
大体三百人です。飛行機は一機に七人乗ります。七人
の三十六機で三百人余りが飛行機に乗って飛んで行き
ます。そういう部隊でした。

最初はこうではなかったのです。最初は本当にエチ
オピア紛争にイタリアが使った飛行機（一〇〇式陸
攻）があったのです。ちょうどノモンハンのとときに、
その古手の飛行機もまだありました。それに新しく九
七重爆一型機というのが来た訳ですけれども、その時
の飛行機の数は、最初は一個中隊で三機、私の入った
頃の昭和十四年の十二月頃は一個中隊は九機編成、二
個中隊で一個連隊になっておったのです。これで支那
事変に戦争をして勝てるのかなと思いました。勝てる
とは思いませんでした。話を聞いておると、中国には
ロシアの飛行機がどんどん入ってきているから、中国
の方が戦闘機が優秀だという話も聞いております。こ
んなことどこまで本当か分からないけれども、一四〇
〇キロまで航続距離があるということは聞いておりま

したが、まあどれだけの戦闘能力があるか分かりませんが、まあそのような状況でした。

そして部隊は兵員は増えなかったのですが、やがて二個中隊が一個中隊増えて三個中隊となり、飛行機が三機から九機になり、九機が十二機編成となり、そして一個連隊は三十六機編成と増えた訳です。もちろん、その時分には、最終的には飛行機らしい飛行機になりましたけれども、今の新幹線とリニアと変わらないような二五〇ないし三〇〇キロの時速です。そうしたような中で戦争に勝てるのかなと思いつながら、だんだん部隊は拡充しました。しかし内地の状況も分かりませんし、また部隊以外の一般の戦争状況も分かりませんでした。ただ分かってきたのは「今日は重慶は晴れ、蘭州は曇り」というような天気予報でした。

そうこうして、その午も終わろうとする時に「タ号作戦」というのが始まって、私は初めて飛行機に乗せてもらいました。初めて乗ったら非常に恐かったです。なぜ恐いかというと、今の飛行機と違っていました。

ンポロ飛行機なのです。飛行場も今のように整備されておりません。そして北京から張家口へ行くもつと先の最前線の運城というところに参りました。この近くに塩城と云い塩が採れるところがあるんですが、そこで兵として初めて飛行機に乗せていただきました。

十二機編成の部隊のひとつの飛行機に対して機長と一機に対して三ないし四人の機付兵というのが付きます。機付長が伍長であれば上等兵一人あと一等・二等兵となります。それだけで飛行機を整備しました。

そのほかに搭乗員としては、いわゆるほとんどが下士官、将校です、兵は乗りません。まあ乗せてもらえないのです。空中勤務者にならないと飛行機には乗れないのです。そして空中勤務者要員というのがありまして、それは特務曹長が選ぶのです。機付兵の中から機関講習の修得したもの、そして訓練期間を終えて空中勤務要員となって、その要員の中で空中勤務の修得した者が空中勤務者となり飛行機に搭乗を許されるのです。普通の兵は乗れません。

昭和十四年がそのように過ぎまして、昭和十五年になり、五月にはドイツがポーランドに侵攻しまして、欧州の戦争が始まっておりました。そのころに私たちは転戦を続けまして、南寧攻略作戦というのに参加しました。従って昭和十五年はあっちへ行きこっちへ行きしておりましたけれども、私は機上機関と射撃の両方を修得させられまして、飛行機に乗ることになりました。そして当時は重慶、蘭州、成都、昆明などに連日飛んで行きました。

まあ機上射撃というものは、飛行機の後方に上がって天蓋を開けて撃つ訳です。一番最初のときに向こうのチェックカベ（ロシア製の飛行機）に遭遇しました。これは早くて高いところの上る。我々は重爆撃機で長距離を行いますので戦闘機は付いてきてくれません。重爆三十六機編隊で飛んだ訳でございますけれども、零機長、零機幅といまして飛行機の間隔なしにちょうど雁行するのです。その編隊は見事なものです。そして先程申しましたように、一機に七人乗っておりますので、ざっと三百人が一緒に飛んでいるのです。

その当時、私の中隊に森曹長というのがおりまして、これは有名な男なのでございますが、重慶の飛行場に着陸しまして、向こうの飛行機をバババと撃って還ってきたという曹長もおりました。それはまあ後から聞いたのですが、新聞にも書かれたようです。

このように戦争、戦争に明け暮れていました。そして中国というのは天候が悪くて、雨が降りまして雨季に入りますと飛行機が飛ぶことができず、暇ができて、これは有難かったことです。何もすることがなので麻雀するか、私はすることがなくて絵を書いたりしていました。

それが昭和十五年になりますと、それは忙しくなりまして、四月に第四次奥地進攻作戦というのが始まりまして、それは運城の方から成都、重慶、梁山と連日の攻撃で、そのほか壁山、武功、威陽とこういう攻撃に参加しておりました。

機長付というのがいて、私は、その機長付と一緒に乗っておりました。その時分は伍長勤務上等兵になら

してもらっていたのかなと思います。飛行機の脚を上げるのですが、今のように油圧で上げるのではなく、手動油圧で手で押し上げる。飛行機の冬はどうかというとうと、エンジンを炭を焚いて暖めるのですが、中には炭で中毒して死んだ者もおりましたが、一酸化炭素の中毒ですね。重慶あたりから還ってきますとね、飛行機は高いところへ上がって氷が付いています。大体高度六〇〇〇メートルですとマイナス五度位です。だから防寒服を着ています。寒さのしが何もありませんので寒いです。

まあこのように戦争の明け暮れだったわけですが、大体飛行機も一年経つと改修・調整しなければなりません。一年経ったら二年は無理なんですね。今の飛行機はそんなことありませんでしょうが、なんぼでも使えますけれども、その当時は整備期間というのがありまして、ある程度時間的に限られておりました。一年経つと総点検というのをやらないといけませんので、昭和十六年十二月五日、北京から内地へ還ってきた訳

です。その間に隊員はハノイ進駐などいろいろありまして、昭和十五年十二月十日、私はお陰で部隊表彰を授与されました。

飛行機そのものは重爆でございますので浜松へ帰り整備しておりましたら、どうしたか滅か尾輪が爆発しまして、そして私は氣を失ってしまいました。その時は私は機付長をしていたんですが、浜松の病院に入院しました。

大体、大東亜戦争の起こるのは予測しておりました。分らないながらも海南島、ハノイ進駐もいたしましたので大体の予測はしておりましたのですけれども、十二月八日とは夢にも思っておりませんでした。私が負傷した五日の日に私の部隊はいよいよ大東亜戦争に参加することとなり、急速、浜松で機種を変えて南方に向け飛び立ったのです。その時の私の氣持は何ともいえない氣持でした。というのは皆が戦地に行っているのに私だけが内地に取り残され、はね除けになつたような氣持で、本当に寂しかったからですね。それからちょうど一年間、入院しておりました昭和十七年

三月六日に除隊、兵役免除、公傷で第一款症、この会場にも私の知り合いが来ておりますけれども傷痍軍人です。

その時分には、上野では松岡さんが傷痍軍人会の会長をしてくれていましたかな、その松岡さんから「お前、傷痍軍人だな」と言われ傷痍軍人記章を頂きました。ところが私のは手だけです。曲がり難いだけです。足はお陰で治ってしまいました。有難いことです。その後召集はなく学校の教員になりました。

ところがやっぱり考えてみますと、このように淡々と喋っておりますけれども、その飛び立った飛行機連隊の三百余人はマニラ攻撃に行きまして、これは後で私の戦友から聞いた話でございますが、十二月八日の未明に部隊長以下全員全滅したとのことです。皆海に突っ込んだり、マニラの岸壁で死んでしまったのです。重爆三十六機がその日の中に無くなった。生きているのは転属した浜松の磐田におりました私の無二の戦友の中崎と、たまたま怪我をして残った私と二人

で、この中崎も去年亡くなりまして、私一人になってしまいました。戦友会をしようにも戦友会もできない。知った人は誰も生存者はありません。

そんな状況でございます。寂しい限りで、戦友会もあってないようなものです。ただ第一教育航空隊当時の戦友会はございます。それ以外はございません。三百余人の霊を弔うことについて、私は朝夕その方々のご冥福だけはお祈りします。はからずも八十歳までこうして生きさせてもらいましたが、この語り継ぎを世代が変わってもして欲しいな、とこう思います。

生命は尊いのです。一挙に三百余人も死にますか。戦争のお陰(?)ですよ、この死んだのは何のお陰か分からない。生き残った私はこうして長生きできるのだ。こう思うと残念でたまりません。いまだに夢にみます、早よう家に帰りたい、八十過ぎても皆様も同じ思いがあるでしょう。夢にみます「早く帰りたいな」「内地へ帰してくれ」と。

最初にも申し上げましたが、自分の中で、戦争という体験は余り他人に語りたくないということは、そう

いう何かが糸を引いているのかも分かりません。子供にも何も話したこともないのですけれども、これを話さずに一生終えるか、はたまた、お話ししていいものか何か分かりませんが、この戦後五十年過ぎた中で、皆様方に語り継いでいただきたいという念願でございます。